

「勇知いも」、その昔

—銘柄名であり、時代に応じて品種を変えてきた—

Web ジャガイモ博物館 館長 あさ ま かず お
浅間 和夫

はじめに

本誌前号（136号）でこれから飛躍しようとしている「勇知いも」が紹介された。本稿ではその銘柄の現在に至る足取りについて、書き留めて参考に供したい。

昔、幕府の命により蝦夷地（今の北海道）等を調査するため、1785（天明5）年2月江戸を発ち、津軽、松前を経て宗谷地方での越冬を試みた役人庵原弥六^{いおはら}らがいた。キツと呼ばれる馬に餌を食べさせる長方形の木箱などで寒さを凌いだものの、翌年の融雪間近い3月になり、宿の記録では『霧氣にあてられ』、つまり当時の水ばれ病（ビタミンB1、C不足の脚気と壊血病の合併症）により案内役を含め数名が辺境で淋しく息を引き取ったところである。これより前の1706（宝永3）年に道南の瀬棚地方で五升芋（ジャガイモ）栽培が確認されていたが、宗谷管内の勇知地方では、いつ頃からジャガイモ栽培が始まったか定かではない。

1869（明治2）年太政官布告によって北海道と命名された。その2年後、北海道開拓のため、東京青山南町など3か所に官園を設けているが、その年宗谷を訪ねてきた山形県庄内出身の官僚北海道開拓判官（今の知事）松本十郎は、そこに畑地が0.7haほどあり、五升芋、大根、葱^{ねぎ}、ささげ、きゅ

うり、そばなどが栽培されていると書き残していた。

寒冷な地域で栽培可能であり、短日時で収穫可能なジャガイモはしだいにその栽培を伸ばし、品種更新もなされていった。「勇知いも」とは、特定のひとつの品種に与えられた名前（銘柄）ではなく、適品種の変遷とともに中身は変わってきている。

1 「ノーザンスター」、「石狩白」時代

「紅丸」がまだ系統名「本育309」と呼ばれていたころから関心を持っていた山崎俊次が1968（昭和43）年私的に配布した冊子『紅丸夜話』によると、

『明治に入ってから、開拓使を中心にアメリカなどからたくさんの品種を（道内に）導入しており、明治中葉頃までは、根室（根室紫）、屯田薯と呼ばれた紫色の品種が主であったが、その後アーリーローズ、スノーフレーク（雪片）が加わり、大正に入って、ルーラルニューヨーカー2号（長白）、アメリカンワンダー（大白）、ノーザンスター（後の勇知薯、稚内薯、白独乙）、グリーンマウンテン（後の蝦夷錦）などが加わり、根室、屯田薯が消えていった。』とあり、1968（昭和43）年北海道農業試験場発行の『北海道農業技術研究史』p238には試験場が旧日本領の樺太庁から「ノーザンスター」

を移入したことが載っている。

1975（昭和50）年3月北海道総務部行政資料課が刊行した『羽ばたけ北海道 北海道回想録 2』p233～245によると、

『このいもは、樺太帰りの船員が持ち帰ったものと推定され、ロシア（品）種の「ノーザンスター（北星）」だったと言われている。』と小松勇（元宗谷農事試作場長）の言葉を載せている。しかしこの品種「Northern Star」は、その名称からも推定できるように、ロシアの品種ではなく、1920年代のイングランドで「Royal Kidney」、「Up-to-Date」などと共に栽培されていたものである。これがどのようなルートで旧日本領の樺太（現サハリン）に入ったかについては不明である。

さらに同じ行政資料課資料で、『勇知農協の幹部であった川越幸七などが、大正末期から昭和の初期にかけて、関西、関東の市場に出荷したところ好評で、市場の方から「ノーザンスター（北星）」と呼んでくれた。』とも書かれている。しかし、この呼び名は北から来た優れたものとして市場関係者が名づけてくれたものではなく、イングランドから付いていた固有名である。

いずれにせよ、いもの肌がきれいで、肉質が緻密で白く、味もよかったようであり、この特徴は後継となった「農林1号」に似ている。

日本いも類研究会のホームページの“じゃがいも品種詳説”の「白独逸」を見ると、この品種の異名として、「独逸白」、「勇知薯」、「樺太薯」などが挙げられ、『北海道農業発達史』下巻には「白ドイツ」としても記載され、後に北海道農業試験場ばれいしょ研究室とも呼ばれていた1965年の資

料では、宗谷より南の美深（試作場？）から入手の「白独乙」として、熟期は中晩生で、形卵円の白いもで、花は白と記載している。「白ドイツ」は、1935（昭和10）年前後に全道で数ha栽培されており、1937年の作付け面積は、アーリーローズ>蝦夷錦>神谷薯>白ドイツ>男爵薯>メークイン>スノーフレーク、ヘブロン、ペポーの順であったものの、1940（昭和15）年になると統計から消えている。

一方、1960（昭和35）年発行の「後志馬鈴薯小史」（編集：富田義昭）134pに倶知安地方のジャガイモ栽培の回顧座談が載っており、そこでの倶知安地区農業改良普及所長池田竹次郎の発言に、

『「勇知いも」については、私は向うの生まれですが、1919（大正8）年（下記註参照）に小松勇（宗谷農事試作場長）が、「石狩白」を持って行って奨励したと言われている。』とあることから、以後この品種も昭和初期の「勇知いも」の柱となったようであるが、「石狩白」の詳細は判っておらず、当時「男爵薯」程度栽培されていた前述の「白ドイツ」（独逸白）の可能性が高かろう。（註：小松勇の赴任は1922年であり、間違いである）

2 「農林1号」時代

ところが、2018（平成30）年7月発行の本誌NO.136、p49に『「勇知いも」は小松勇が開発した「農林1号」を栽培したことで更に販路を拡大・・・』旨のことが書かれている。しかしこの記述は間違いである。この「農林1号」の育成は1936（昭和12）年国費により島松村（現恵庭市）に開設された馬鈴薯玉蜀黍^{とうもろこし}指定試験地（後に北海道



ばれいしょ農林1号

農事試験場に併合)において、1943(昭和18)年田口啓作らにより行われたものである。

「男爵薯」の子「農林1号」は中晩生の豊産でいもも花も白であり、環境適応性が高く本州でも知られており、親より甘味と粘りが強かったため、小松勇らの栽培指導や勇知農協の販売活動により「勇知いも」として知られていった。こうして1954(昭和29)年頃の宗谷支庁(現総合振興局)管内のジャガイモの作付けはピークとなったものの、冷害凶作に遭遇することの多い麦・豆などの農作物の栽培から国の勧める草刈型酪農への転換政策に添った方向へと舵取りが変わっていった。そのような中で、1955(昭和30)年代は「勇知いも」の最盛期を迎え、50kg入り俵46,000俵(2,300 t)も出荷したほどであった。しかし、この転換政策の浸透につれて、ジャガイモの栽培は減少して行き、1972(昭和47)年には出荷皆無となった。

冷涼な丘陵地帯であるため、以後草地放牧型酪農で推移しており、ジャガイモ栽培は家庭消費程度にとどまっている。そこで2013(平成25)年「わっかない勇知いも研究会」をつくり「勇知いも」の名で商標登録し、安心安全且つ品質の高いクリーンな農産物の生産に努めることになった。今ここでは北海道農業試験場育成(西部幸男ら)のビタミンCが豊富で、肉の黄色な「キタアカリ」(農林29号)、及び名城大学名誉教授川上幸次郎ら育成の「アンデスレッド」、「男爵薯」などが生産されている。

参考：小松勇とは。1996(明治29)年山形県庄内村で生まれ、21歳のとき北海道に渡り、道南の檜山農事試作場助手を務めた後、1922(大正11)年稚内の北海道庁立宗谷農事試作場の開設に伴い、声問村字幕別(その後の恵北駅、1989年廃駅)で当時の建設列車から降り立った。宗谷地方は毎年のように冷害凶作の危機にさらされ、無霜期間が短く、8月に初霜を見ることがあり、表土は薄く、下は強酸性の重粘度である。そのような土地に適する畑作物や飼料作物の栽培試験、泥炭地の改良試験などに従事し、1942(昭和17)年北海道農業試験場稚内分場と改称された翌年ここを退職し、2か年運送会社に勤務後、勇知農協、稚内市役所の農業技術員となった(分場は1950年廃止)。この時「農林1号」こと「勇知いも」の栽培指導などに従事し、これらの農業技術指導活動により、1962(昭和37)年安孫子賞を受けている。